

今 ぜひ お伝えしたいこと
「コロナ振り返り」「健康寿命」「かかりつけ医」

◎村上 博¹⁾
愛媛県医師会長¹⁾

私は昭和 57 年に卒業し愛媛大学第 1 内科に入局し、骨髄穿刺のやり方から学び始めた。検体がうまく採れると意気揚々と引揚げ血球の数を数えるのであるが、保険をかけるつもりで検体を中央検査室にも提出し、答えが返ってくるのを息を飲んで待った。結果は、笑話みたいに大外れで恥ずかしい思いだったが、検査に出しておいて良かったなあと密かに安堵の連続だった。患者さんにしてみれば、臨床検査技師は命の恩人である。

5 年前の 7 月、われわれは西日本豪雨災害に襲われていた。新米の県医師会長であった未熟な私は何から手をつければよいのか判らずお手上げ状態に陥っていた。そのちであるが臨床検査技師会のチームが被災地に入り避難所を巡回してエコーで深部静脈血栓の検査をしてまわっていると聞いた。災害関連死を減少させる極めて重要なアクションである。コロナは 2 類から 5 類に変わること感染の全体的な動向が見えにくくなったが、全国的な大きな第 9 波になり、愛媛県も飲み込まれ、医療のひっ迫が目前である。第 4 波・第 5 波の頃は罹患してしまうと治療薬もなく、死亡率が 3~4% と非常に厳しく得体のしれない病気に恐れられた。診断には PCR 検査が必須であり、その PCR 検査も 1 回の検査に半日くらいかかり、検査で渋滞していく毎日の中で臨床検査技師達は夜を徹して、感染の危険に晒されながら、身を粉にして任務を遂行した。心から感謝を申し上げたい。

これからは診断にも治療にも遺伝的な検索が欠かせなくなり、あつかう情報量があまりにも多いので AI が人間の代行をする時代が目前である。臨床検査技師の世界も大きく変わっていくが、臨床検査技師の果たしている役割と価値はいささかも色褪せることは全くない。

本特別講演では講師プロフィールの紹介を丁寧に行いたい。演者は長く悪性関節リウマチを患った開業医の子弟であった。ところがそういうことは履歴書には表現されていない。履歴書の「行間」がどういう意味を持つのかを読み解くことが重要である。

26 歳で医局を離れ大海に漕ぎ出すことになった自分に医局の教授がくれた言葉が「石の上にも三年」である。私はこれまでのこの言葉を何度も噛みしめてきた。また私はこれまでに輸血 2 回と手術を 1 回受けて現在を維持している。これは災いにほかならないが「人間万事塞翁が馬」である。病気はしない方がいい。しかし、ひどい病気を体験して初めて患者の気持ちがわかることも多い。

さてコロナ第 4 波・第 5 波の頃は死亡率も 3~4% で非常に厳しく、有力な治療薬も見つかっておらず主たる死因はコロナそのものによるサイトカイン・ストームと思われる。第 7

波・第8波と進むにつれ死亡率は0.26~0.3%にまで低下したが、患者数が桁違いに多いために「死亡者数」はかえって増加してしまった。死亡者の大部分は基礎疾患を持つ人や高齢者に偏っている。重症化しにくいとは言え、高齢者や基礎疾患を有する者にとっては、まだまだ厳しい疾患である。感染症法上の取り扱いが2類から5類に変わった現在、やかましいことは言うべきでないとする発言が多く聞かれるが、高齢者医療や救急医療の最前線に身を置く医療者の耳には無責任にすぎるように聞こえる。国民が分断することなくコロナを克服しなければならない今、第7波・第8波から何を学んだのかが問われている。感染の波を最小化する努力と社会経済を維持することは対峙する概念ではないのである。

医療スタッフの献身的な努力と社会システムの整備によって国民は多くの課題を克服し限りなく平均寿命を延ばしてきたが、現代の課題は、平均寿命を延伸しながら、さらに健康寿命を限りなく平均寿命に近づけることにも重点を置いており徐々にではあるが事績も出てきている。体力データを見ても私たちが若返っていることがわかる。しかし愛媛県民の健康寿命は男性・女性ともに平均をかなり下回る（2019年 男性は71.50歳で全国ワースト2位、女性は74.58歳で全国ワースト4位）。愛媛県循環器病対策推進計画では2040年までに、それぞれ74.50歳以上・77.58歳以上と健康寿命を3年以上伸ばそうとしている。

「かかりつけ医」とは「健康に関することをなんでも相談できる上、最新の医療情報を熟知して、必要な時には専門医、専門医療機関を紹介してくれる、身近で頼りになる地域医療、保健、福祉を担う総合的な能力を有する医師」と定義され、概ね全ての医師にとっての目標である。今後の地域包括ケア社会（さらに上位概念である地域共生社会）の実現に向けて、かかりつけ医が果たすべき役割について考えてみる。